

集團心理現象の概念及び本質

米田庄太郎

四

今余が假りに箇人心理説と稱するものの主旨は、ヘーホルマン、パウエルが其好著言語史の原理の序論に於て、ラッアルス、シュタインタールの民族心理學を論評する中に明らかに説述されて居る。 Hermann Paul, Principien der Sprachgeschichte, 1st Aufl. 1880. 更に箇人主義的に社會現象の説明を企だつる總ての學説に於て、吾人は其主旨を發見することが出来るのである。併し茲には只實在的集團精神説を論破して、之れに代つて集團心理現象の根本的説明を試みんとする箇人心理説の最近の企だてに就て少しく説述するに止めて置く。

余の假りに箇人心理説と稱するものゝ大體上の主旨は、さきに述べし如く、心理的進動フオルグレングとしては只箇人心理的のものあるのみにして而して其中には社會的に、即ち人

間的境遇より來る刺激によりて制約されるものがあるが、併し彼等も根本的には毫も他の心理的進動とは異ならないと云ふことである。從來又今日も尙ほ社會學者間に一般に行はれて居る實在的集團精神説に對して、近來此の箇人心理説は段々勢力を振ふ傾向が見ゆるのであるが、吾人は其根源は一般的心理學及び認識論に於ける新傾向の發達にあると考へるのである。それで先づ簡單に其等の新傾向の大意を述べて置かうと思ふが、夫れ實驗心理學の勃興せる始めに於ては、世人は其研究よりして得らるゝ效果に對して期待する處甚大であつた。然るに其後其研究の發達するにつれて始めに豫期せしほどの結果の得られないことが明かになるや、近來他の方針を以て少くも之を補充する必要が感じられて來た。而して此傾向は殊にメンタル機能心理學と稱せらるゝものに於て、即ち生來的にして更に還元することの出來ない意識機能を認むることによりて複合的なる心理的進動の經驗主義的説明の失敗を補はんとする企だてに於て、又心理學を大に形成的な科學となさんとする傾向、即ち其研究を心理的進動の進行形態のみに制限して内容に關する一切の考察を排除せんとする傾向、つまり只體驗其事のみが心理的にして體驗されたる物は心理的でないといふ傾向に於て現はれて居るのである。而して此見解から考へると只體驗の

瞬間に於ける箇人意識の直接體驗のみが心理的性質を有することになる。此くて社會的生産物にありては、其精神的性質は疑はれないとしても、之れを心理的のものと認むることが出来なくなるのである。彼等はあるがまゝでは意識進動ではなく機能の性質を有するものではなくして、全く内容の性質を有するものと考へねばならなくなるのである。而して認識論に於ける最新の一傾向も亦此の見解の發達を助長する影響を及ぼして居ると思ふ。新認識論は其の對象說 Gegenstandstheorie と稱せらるゝ最新の方向に於て、思考の對象を其本質に付て十分に決定せんと企たでゝ居るが、今其主意に従ふて社會心理學の主要對象たる集團心理現象の本質を充分に考察すると、彼等は純思想内容であるから心理的構成物ではなくして、之れとは全く種類の異なる對象であつて、觀念的對象イデアレリヒンゲンステイネとでも稱す可きものであると見る見解が發達して來たのである。(心理學及び認識論に於ける新傾向と箇人心理説との關係に就ては Sganuzzi, Die Fortschritte der Völkerypsychologie von Lazarus bis Wundt, 1913, Cap. VI. 參考)。

最近の箇人心理説の根源は以上述べし如く心理學及び認識論に於ける新傾向にあると思はれるのであるが、余は茲に認識論的方面よりして出發せる箇人心理説の

代表説としてジムメルの説、又心理學的方面より出發せるものゝ代表説としてブレインナーの説の概要を簡単に説述して置かうと思ふ。

ジムメルの此問題に關する思想は氏の社會學上の幾多の著作論文中に散見して居るが殊に氏が *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 26ster Band, 1908 に於て公にされたる一短論文 *Ueber das Wesen der Sozial-psychologie* に於て氏は之を簡単に總括的に論述されて居る。それで茲には右の論文によりて氏の所見の概要を述ぶる事とするが、今氏の考ふる處によれば、箇人心理的進動に對立或は並立する社會心理的進動と稱す可き特種の心理的進動が存在し、隨うて又箇人心理的進動の運載者として箇人心の存在するに對して社會心理的進動の運載者として社會心とか社會意識とか民族精神とか稱せらるゝものゝ存在するを推斷し、而して夫れより社會心理學なるものが箇人心理學と其本質及び運載者を異にする一科學又は之れと對立し並立する一科學として存立す可きものと考ふるは、根本的に謬見にして、心理的進動としては只箇人心理的のものあるのみにして、所謂社會心理的進動なるものは其の特殊なる一種に外ならぬ、隨ふて社會心理學なるものは箇人心理學に對立又は並立する一科學に非らずして其の一部門に外ならぬものである。然るに今日多くの學者が社

會心とか社會意識とか民族精神とか稱せらるゝ箇人心以上の心理的實在物を認め、箇人心理的進動以外に社會心理的進動なるものの存在するを説くのは、是れ社會現象集團心理現象の本質を誤解して居るからである。而して此の如き誤解を起さしむるに至れる動機或は原因として特に注意す可きものは三種ある。

(1) 今社會内に存在し、直接には箇人に依屬しないが而も其の心理的性質の疑ふ可からざる生産物即ち諸般の集團心理現象、文化現象が存在する、而して若し此等の現象が天から落下せるものでない以上は、吾人は其の創造者及び運載者として箇人の彼岸にある心理的主體として社會なるものゝ存存するを認めざるを得ないと云ふ思想からして多くの學者は民族精神、社會意識時代精神等を一の實在的創造的なる勢力として觀念する謬見に陥つたのである。併し箇人的なる心意以外に心理的進動を認めんとする此の神秘主義は、吾人が法律及び習慣、言語及び文化、宗教及び生活形態等が依て以て生起し、且つ現實的である處の具體的精神的進動を其の觀念的なる、夫れ自身に於て考へられたる内容より區別することによりて一掃されるのである。吾人は字典や文典に現在する言葉や文法や法典に於て嚴存する法的規範や、又宗教の定教的内容などに就て彼等は假令超歴史の意味や自然法則及び論理學の規

範の意味に於てではないとしてもやはり妥當であつて、箇人によりて實際に適用される箇々の場合より獨立に内部的威嚴を有すると云ふことが出来る。併し彼等の内容の此の妥當性及び威嚴は經驗的運載者を必要とする心理的存在ではない。茲に吾人は眞に只歴史的にのみ實現されるものであるが、而も其の超箇人的創造者及び運載者を要求するが如くに見ゆる其の内容の獨立的全體に於ては、歴史的ではなく只觀念的イデアレに存立する處の特別なる範疇を發見するのである。而して只其の箇人心が造り又運載する一片、又は其の内容が依て以て表現される概念のみが心理的實在性を有するだけである。箇々の言葉及び言語形式の經驗的起源并に箇々の場合に於ける其實際の適用や、商人、犯罪者、裁判官等に於ける心理的要素としての法律の效果や、或文化内容が一箇人より他の箇人に傳へられ、又各箇人に於て更に發達する程度及び方法等は總て全く箇人心理學に屬する問題である。言語、法律、其他の一般的文化生産物は其の箇人的實現過程より切り離して見れば、社會精神と云ふが如き主體の生産物ではない。彼等は本來客觀的精神的内容にして心理的のものでないことは宛もかの判斷の論理的意義は只心理的活動内に於て、又只之れによりてのみ意識實在性を得るものなるに係らず夫れ自身に於ては全く心理的のものでないと

云ふが如きものである。實際に於て彼等の起源は箇人心理的のものである、併し統一ヘイトリのものでもない。之れに反して彼等が統一アインハイトとして考へられる以上は一般に何等の起源をも有するものでなく、一の觀念イデアライ、インヘルト的内容である。是れピタゴラスの定理が其内容から見れば全く起源を有しないものであると同じ理である。

(2) 群集的行動に於て其行動の結果の統一なるより推して其の原因の統一なるを臆斷せんとするは殊に集團心理學を箇人心理學より區別されたる一科學として建設せんとする人々に於て見る處の傾向であるが、吾人は是れは多數の主觀的心理的進動の外部的表面的に統一なる結果を一の統一なる心理的進動即ち集團心に於ける一の進動の結果として解釋せんとする謬見に基づけるものであると思ふ。實際に付て詳しく研究して見ると集團的行動の統一性は只其の目に見ゆる結果に於て存在するのみにして、内部的原因主觀的運載者の方面に於てはかゝる統一性の存在せざることは明らかに發見されるのである。

(3) 群集内にある箇人の感情、行動、表象等が單獨孤立の箇人に於て現はるゝ心理的進動とは異なる性質を有すると云ふことからして、社會心理學を以て箇人心理學に對立する一科學として必要缺く可からざるものと見んとする動機が起つて居る。

併し詳しく研究して見ると、群集内にある箇人の心理的進動の特色は、かゝる場合に於ては各箇人は他人によりて圍繞されて居ると云ふことの影響より生ずるものにして、之を説明する爲めに別に新しき超箇人的なる心理的統一を認めねばならぬ必要はないのである。此の場合に見る處の差異はつまり他人によりて影響されて居る箇人の行動が他人によりて影響されて居らない箇人の行動に對して現はす處の差異である。其の差異は全く箇人心に於て起る處のものである。而して社會心理學的問題として茲に吾人が正當に取扱ひ得るものは、つまり箇人の精神的過程は社會的境遇より來る一定の影響の下に於ては如何なる變動を受くるかと云ふことである。而して是は全く一般心理學的問題の一部分、即ち箇人心理學の一問題である。要するに社會心理學なるものは正當に觀念すれば一般心理學或は箇人心理學の一部門として、心理的進動を身體に結び付けて研究する生理的心理學と並立相關し、之を他人の心理的進動に結び付けて研究するものである。

ジムメルは夫より氏の統計的類型及び民族學的類型と稱する諸現象と眞實なる社會心理的現象とが一般に混同されて居ることを説き、又其混同はつまり其等の現象が結局社會心理的根柢即ち多數の箇人が一の類型、一の平均、何等かの統一的形象

を表現する基礎たる彼等の一様性或は類似は、彼等の相互的影響なくしては生起することが出来ない。と見る見解より起れるものなるを論じて居る。要するにジムメルの主旨とする處は社會心理現象或は社會現象の特徴は箇人心の相互作用、即ち一の箇人心が他の箇人心によりて影響されると云ふことにして、而して此の作用は箇人心内に於て行はれ、箇人心以外に於て行はれるものでない、随ふて社會心理學の對象もやはり箇人心或は心理的箇人にして、其れ以上或は以外に獨立に存在すると見られる社會心とか民族精神とか稱せらるゝ様なものでない、社會心理學は箇人心理學と並立又は對立する科學ではなくして其の一部門である、即ち箇人心を其の身體との關係に於て研究する生理的心理學の部門と並立相關して、一の箇人心を他の箇人心との關係に於て、即ち心を心との相互關係に於て、即ち一の箇人心を他の箇人心によりて影響される關係に於て研究するものである、と云ふにあるのである。

今主として新認識論の見地より見て、箇人心理學に對する關係に於て社會心理學の本質を決定せんとせるジムメルは、以上述べし如くに、集團心理現象の本質に關して實在的集團精神説を排して、箇人心理説を唱ふるに至つたのであるか、ブレインナは心理學の最新の見地より見て、殊にザントの説を論破して、さらに箇人心理説を

一層徹底的に展開して居るのである。それで余は茲にブレインナーの説の大要を述べて集團心理現象の本質に關する最新説の要點を一層明らかにして置かうと思ふ。 Brönnert, Zur Theorie der Kollektiv-Psychischen Erscheinungen. Zeitschrift für Philosophie und Philosophische Kritik, Band 141, 1911.

先づブレインナーはゾントの説に付て如何に實在的集團精神説を排斥して居るかと云ふに、氏は第一に集團心理現象は箇人の多數者に於ける意識進動の結合を基礎とするものと見る説を左の如くに論評して居る。

今吾人がゾントの意識概念に従かひ、意識とはつまり心理的現象の結合であると解するに於ては、此の結合の概念は果して同じ意味に於て箇人の多數者に適用し得らるゝものなるや否やと云ふ問題を起さざるを得ない。箇人的意識進動の結合は例へは連合の法則の如き一定の心理的法則に於て表はれて居る。併しAなる箇人に於ける一の意識進動がBなる箇人に於ける一の意識進動を連合的に呼び起すと云ふことは如何に考ふ可きか。其他何れの心理的規律性に付ても夫れが箇人の多數者に適用されると云ふことは如何に解す可きか。ゾントは其の詳しき意味に付ては何等吾人に教ゆる處はない。ゾントは只箇人の心理的進動に適用され得る一

の一般的概念が其の内容及び範圍に於て多少の變化を加ふることによりて多數箇人の心理的進動の上に適用され得ることを云ふに止まるのである。箇人の多數者の心理的進動は確かに一定の同グライヒハイテン様エーシリヒカイトと類似を表はす。併し此事實は吾人をして只同様と類似を云ふより以上に進むを許さない。更に箇人の多數者の心理的進動は一の箇人が他の箇人の上に影響を及ぼし得ること又一の箇人が言葉及び行動によりて他人の心理的進動を變化し得ることを示す。而して茲に吾人は一種の結合の存在するを認むることが出来る。併し此結合は客觀的刺戟と感覺隨ふて其の感覺の開發する知覺との間に成立する結合に外ならぬ。吾人は箇人心内の結合と同じ種類の箇人の間に於ける意識運動の結合なるものに付て經驗上全く其存在を認むることは出来ないのである。

ブレトナーは第二に多數者の心理的結合は結合する心理的進動の單純なる總計以上の或物及び之れとは異なる或物であると云ふヴントの説に付て左の如く論評して居る。

吾人若しヴントの解するが如き意味にて箇人心間に結合の成立することを認め得ない以上はヴントの右の思想は保持されることは出来ないのである。今ヴント

は右の思想を單に結合其物のみならず又其の見掛上の成果、即ち言語、神話及び風俗習慣等にも適用して居る。然るに吾人若しヴントの意味に於て多數者の結合が此等の生産物を産出することを認めないときは、多數者の生産物は果して箇人の生産物の總計以上の或物又之れと異なる或物であるや否やが先づ問題となるのである。此問題は一の立場より見れば肯定せねばならぬが他の立場より見れば否定せねばならぬ。吾人若し箇人を社會外に存立する全く孤立せる實在物と解するとき、此問題を肯定せねばならぬ。勿論かゝる實在物は實際には存在しない、併しかゝる實在物を考へ、之を一定の考察の公準とすることには何等の差し支へはないと思ふ。茲に千人のかゝる孤立せる箇人があるとすれば、其の生産物は社會を成して生活する人間の多數者の生産物よりは確かに異なるものであり、又一定の意味に於ては夫よりもより少なるものである。而してヴントの説は是れ以上を意味しないものであらば、夫れは自明の眞理である。社會に於て生活する人間は彼れと共に其社會を成す處の他人によつて、又其社會の共同目的によつて自から影響される。随つて其の箇人の活動の生産物は同種の影響を受けない箇人の活動の生産物とは異なるならざるを得ない。されど吾人若し社會に於て生活し、而して既に現在及び過去の

社會生活の影響の下に生長せる箇人のみを眼中に置くときは、彼等の活動の生産物の總計は彼等の結合の總計よりはより大なる又之れと異なる或物であると云ふ主張は維持し難き見解にして又謬見である。其の維持し難いと云ふは、是れつまり社會に於て生活し、社會によりて影響されて居る箇人の精神の外に此等の精神の結合なるものは存在しないからである。又其の謬見であると云ふは、是れつまり一族の言語、神話、風俗習慣等は夫れ夫れの箇人並に小團體の特異性を引き去つたる箇人の言語、神話及び風俗習慣の總計に外ならないからである。吾人若し此等の特異を總計より引き去るときは、吾人は寧ろ民族の言語は箇人の言語の總計よりもより少なるものであると云ひ得るのである。

プレトナーは第三に箇人の間に成立する心理的結合は其の作用によりて其事^グ實的^{トセリツ、ウイルクサムカイト} 教^{トセリツ、ウイルクサムカイト} 驗^{トセリツ、ウイルクサムカイト} を證示するが故に實在的のものであると云ふザントの説を評して左の如く論んじて居る。

今此説を批判するに當て、吾人は全體意識、全體精神及び全體意志に付てザントの主張する實在と彼が民族精神の生産物として考へる言語、神話及び風俗習慣等の自明なる疑ふ可からざる實在とを區別して考へねばならぬ。

實在に付ては吾人は先づ經驗的實在と假設的實在とを區別し、更に之れと交叉する物理的實在と心理的實在との區別を立てることが出来る。經驗的實在とは現實に存在するとして知覺し得らるゝものにして、假設的實在とは吾人が其實在が他日知覺されるであらうと云ふ希望を有つて一定の瞬間に於て假りに實在的と認むる或物である。而して外界の事物及び事象は物理的實在の領分に屬し、吾人の意識進動は心理的實在の領分に屬するのである。吾人は物理的實在の領分に於ても亦心理的實在の領分に於ても假設的實在を設定することが出来る。而して吾人若し實在の概念を一般に其の中に含まされて居る内容以上に推し擴めない場合には概念は其儘では何等の實在をも有しない。概念其物に於て實在的なるもの、即ち心理的に實在的なるものと云へば、吾人が概念を考へる場合に吾人の意識に現存する表象感情及び意識状態である。

今以上述べし實在概念の助けによりてヴントの説を吟味せんに、ヴントの説述する處によりて考ふれば、吾人は全體意識、全體精神及び全體意志に對して經驗的意味に於ても亦假設的意味に於ても物理的實在を認むることは出来ない。是れヴントも承認する處である。併しヴントの概念構成物ベグリップフツタベルデンには本來心理的實在をも認むるこ

とが出来ない。是れ諸異の意識の結合は決して此等の意識の何れのものゝ意識進動でもあり得ないからである。此結合は只箇人意識より異なれる、而も之れによりて興へられたる一の全體意識の意識進動としてのみ考へ得らるるものである。而もかゝる特別なる全體意識の存在はヴントも主張して居らない。要するに多數者の意識進動の結合、即ち全體意識、全體精神、全體意志は物理的にも亦心理的にも、經驗的にも亦假設的にも、何等の實在をも有することが出来ないと結論しなければならぬ。併しヴントは此の場合に實在概念を以上述べしとは異なる意味に解して居る。されば茲にヴントの解する意識の實在概念は果して正當であるか、又其の實在概念によれば多數者の意識結合の實在性は主張され得るかを考究せねばならぬ。今ヴントに従へば精神生活の實在性の尺度は事實的效力或は效驗と云ふことであるべきものである。されば彼の實在^{レヒエン}或は現實^{ウイルクリッセン}の觀念は作用^{ウイケン}或は作動の概念と最も親密に結合して居るのである。然るに吾人の考ふる處によれば、只效力^{ウイルク}或は效驗^{グロムカイ}と云ふことに於てのみ實在^ト（精神的のものたる）と物體的のものたるを問はずのクリテリウムを認めてはならぬことは容易く理解されると思ふ。吾人は總ての應有的なる對象或は精神的進動を或未知者の作用の結果として觀念することが出来

る。併し夫れが爲めに直ちに其の未知者を實在と推斷することは出来ない。若し吾人が臆測する或未知者の效驗からして其未知者の存在を推斷し得るものとすれば、吾人は神話的作物に於て好んで用ひらるゝ論理に對して何等の異議をも挿むことは出来ない。而してゾントの論理は本來之れと異ならないのである。吾人若し一の進動^{フオルガジツ}が他の進動によりて制約されて居ると觀念する場合に、此の他の進動の實在を證明する爲めには直ちに其の他の進動其物に付て其實在性を研究せねばならぬ、單に其の効果が現實であると云ふだけで其實在性が證明されると考へてはならない。更に若しゾントの主張が正當であるとすれば、吾人は單に非現實的進動の現實性を主張し得るのみならず、又現實的進動の非現實性をも主張せねばならぬ場合が出来てくる。要するに現實性^{ワイルクリッヒツフト}と效驗性^{ワイルムクツムカイト}とは全く性質の異なる概念である。隨ふて吾人はゾントの主張するが如く多數者の意識結合の效驗性を認むることからして直ちに其結合の實在性を推斷してはならないのである。

ブレインナーは以上述べし如き批評を加へて實在的集團精神説の標本とも見做すべきゾントの説を破壊せんと試みて居るのであるが、然らばブレインナー自身は集團心理現象の本質を如何に説明せんとするのであるか。余輩は彼の説に於てさ

さにも述べし如く、余の假りに箇人心理説と稱するものの最も徹底的なる又最新の展開を見るのである。

ブレインナーは心理的事象の同様性 Gleichförmigkeiten der psychischen Geschehens 即ち同様なる或は類似せる條件の下にありては諸異の人々に於て同様なる或は類似せる體驗が起る untergleichen oder ähnlichen Bedingungen finden bei verschiedenen Personen gleiche oder ähnliche Erlebnisse と云ふことを以て吾人の經驗科學全體の一基礎として立て、而して先づ之を心理學上の最近の實驗によりて論證し、夫れより右の命題を適用して一切の集團心理現象の根本的説明を試みんとするのである。但し氏が右の命題の心理學的論證に於て主として其の根據とせるは左の諸氏の實驗である。

Thumm und Marbe, Experimentelle Untersuchungen über die psychologischen Grundlagen der sprachlichen Analogiebildung, 1901.

Schmidt, Zeitschrift für Psychologie. Bd. 28. 1902.

Saling, Zeitschrift für Psychologie. Bd. 19. 1908.

Reinhold, Zeitschrift für Psychologie. Bd. 54. 1909.

Marbe, Zeitschrift für Psychologie. Bd. 56. 1910.

ブレインナトは先づ今日の社會學者の間に於て集團心理現象の經驗的基礎に關して一般に行はるゝ見解即ち之を箇人と箇人或は心と心の相互作用と見る見解に付て、其の箇人と箇人の相互作用なるものが集團心理現象の基礎となるのは是れつまり心理的事象の同様の事實に基因するものなるを論證せんと試みて居る。今 A B 二人の間に相互作用が行はるゝと云ふは、是れつまり A の思考、感情及び行動が B の思考、感情及び行動によりて影響せられ、又 B の夫れが A の夫れによりて影響されることに外ならぬ。而して此の影響されると云ふことは多くの場合に於て A は B を模倣し、又 B は A を模倣すると云ふことに於て現はれる。併し只夫れだけで盡きて居らない。B は A に於て彼れ自身孤立して居つては遂行しない行動を見、又彼れ自身のと一致しない A の知覺、感情、願望等に就て聞くこともある。而して A 特有の此等の知覺、感情、願望及び行動等は B が之を見聞する以上は B 自身の行動の條件となるであらう。此くの如くにしても亦 A が B に影響するのである。此くて相互作用の結果は孤立せるものと見做されたる箇人に對しては其行動を決定する條件とならないと思はるゝものが、眞實に之を決定する條件となると云ふことである。要するに相互作用なるものはつまり箇人の多數者の心理的事象の流れ行く其の條

件の同様性を一層大ならしむる結果を生ずるのである。而してかゝる結果を生ずることによりて集團心理現象の基礎と見做されるのである。

次にブレインナーはシゲレヤルボンなどの集團心理學者が特に其の研究對象として詳しく論述して居る群集心理現象もつまり心理的事象の同様性の特殊なる場合に外ならぬものにして、此の如くに見て始めて十分に又根本的に説明し得らるゝものであり、且つ其等の人々も暗に在の事實を承認して之れが説明を下して居ることを論じて居る。又模倣及び暗示は多數者の心理的事象の同様性を強めるものであるが爲めに群集行動の共動的勢力として有力であるのであつて、決して集團心理學者の考へるが如く、夫れ自身で群集行動を惹起するものでないことを論じて居る。

更にブレインナーは法學者か法人論に於て前定する集團心理現象の理論を論評して、法人の概念は其の何れの方面に於ても、つまり心理的事象の同様性の事實を基礎として立てられたるものにして、此の事實をよく理解することによりて始めて法人の概念は正當に説明し得らるゝものなるを論じて居る。要するにブレインナーは一切の集團心理現象は同様なる或は類似せる條件の下に於ける心理的事象の同

様と云ふこと、即ち多數者の一箇人は同様なる或は類似せる條件の下に於ては他の箇人と同様なる或は類似せる行動をなすものと云ふ事實を根柢として發現するものと考へ、而して左の如くに論じて居る。即ち此の心理的事象の同様の異名以上なる又之れとは異なる或物として全體意志、民族精神、法人等を觀念することは無用である、全體意志とか民族精神とか法人とか云ふものはつまり一定の心理的事象の同様より發生する概念に外ならぬものにして此等の概念に特有の實在を認む可き何等正等なる理由は存在しない、而も之を實在と考へる傾向の一般に行はるゝは、是れ目前にある概念を直ちに實在物に引き上げんとする哲學史上に於て屢々見る處の謬見の影響によるのである。實驗的に證明されて居る處の心理的事象の同様と云ふ事實は集團心理現象を 驗的に説明する爲めには充分なるものにして夫れ以上に何等の實在をも認むる必要はない。

集團心理現象の本質に關して、今日の社會學及び社會科學或は文化科學に於て行はるゝ最も重要なる二種の學說と思はるゝ實在的集團精神說及び箇人心理說の本義及び兩者の根本的差異は如何なるものであるかは、以上やゝ詳しく論述せる處によりて明らかにしたと思ふか、最後に余自身は此等二種の學說の批評的考察により

て目下如何なる思想に到着して居るかを簡単に論述したいと思ふ。

五

前二節に於て述べ來りし處によりて、今日集團心理現象の本質を科學的に説明せんとする二種の主要なる學說、即ち余が假りに實在的集團精神說と稱するもの及び個人心理說と稱するもの、主意は如何なるものであるかを、大體上明らかにしたと思ふが、然らば此等二種の學說を批判的に考察すると、其の孰れがより正當なるものと考へらるゝであらうか。此處にあまり詳しく論述して居る暇はないから、只大體上の論述を試みるだけに止めて置かうと思ふが、先づ此等二種の學說の差異を根本的によく理解して置くことが肝要である。

今此等二種の學說は表面上考へらるゝ程果して實質的に差違するものであらうか。換言すれば個人心理說の最新代表者と思はるゝブレインナーがザントの説に對して下せる批評によりて吾人が印象される程、實在的集團精神說と個人心理說とは實質上根本的に相違するものであらうか。スガンチニは之れに付て在の如くに概論して居る。「更に集團心理現象に關して上に述べし種々なる解釋は、其の多くの

代表者にありては、内面的に、即ち實質的見解に於て相互に離反するよりは寧ろ外面的に即ち命名に於て相互に差違するものである。一層詳しく分析は多分此の問題に關して相争ふ幾多の解釋は實質的に根據ある争論よりは寧ろ言葉の上の争論であることを證明するであらう。一の實在的なる民族心の存在を認むる神秘論者に至るまでも總ての研究者は結局一切の社會的進動は只其の個人意識内に流れ行く部分に於てのみ實在的であることを認むるに於て一致して居る。民族心、人種心等は個人心以外に於て如何様にかして存在する何物でもない。諸説の差異は其の大きな部分に於て用語の不明瞭なることと基本概念の定義の不充分なることからして起る誤解に基つけるものである。集團主義者は假説的な全く孤立的に生活する箇人より出發して居るが、之れに對して箇人主義者は始めから箇人を現實にあるがまゝに即ち其の一切の活動に於て社會的に影響せられ又社會的に形成されたる實在物として觀念して居るのである。Gegenzini, Fortschritte der Völkerpsychologie von Lazarus bis Wundt. 1914. Kap. VI.

余も二種の學説の差異に付ては大體上スガンチニと同様な考へを抱いて居るので、異なる言葉で云ひ表はされて居る思想の實質をよく吟味して見ると、兩者は其

裏に潜める哲學的又は心理學的見解や考察の見地に於て差異する處あるが爲めに異なれる色彩を有するが併し經驗的にあるがまゝに集團心理現象の本質を觀念する點に於ては別段に差異する處はないと思ふ。余は茲に便宜上特にブレインナーがヴェントの説に加へたる批評と彼れ自身の説とを批判的に吟味することによりて右の主旨を明らかにして置かうと思ふ。

今ブレインナーがヴェントの説に對して加へて居る第一の批難は、前節に於て述べし如く、箇人意識内に於て行はるゝ心理的現象の結合と云ふと全く同じ意味の意識進動の結合が箇人意識と箇人意識との間に存在すると見るは穩當でないと思ふことである。併しブレインナー自身も一の心が他の心の上に影響することは認めて居る、又此場合に一種の結合が成立すると云ひ得ることも認めて居る。それでブレインナーの主張する處はつまり此結合はヴェントの考へる如く箇人意識内に行はるるものと全く同じ性質のものでなく、客觀的刺戟と感覺及び知覺との間に成立する結合と同じ性質のものであると云ふことに歸著するのである。而して今嚴密に云ふ場合にはブレインナーの主張するが如くに考へるが穩當であることは云ふまでもない。併しヴェントは果してブレインナーの批難するが如く箇人意識と箇人意識

との間に成立する意識進動の結合は箇人意識内に行はるゝものと全く同一のものと考へて居るや否やは問題である。成程一見すればヴントは兩者を全く同じ性質のものとして考へて居る様に思はれる。併し實際氏の論じて居る處を詳しく吟味して見ると氏は實質上箇人と箇人の間に存立する意識進動の結合は箇人意識内に於て連合の法則によりて心理的現象の結合するが如きことゝ全く同じ性質のものでなく、刺戟と反應との間に存在する結合と同じ性質のものとして考へて居ることが明らかに認められる。但しヴントはさきにも述べし如く心と心の相互作用の過程其の物を直接に詳しく考究して居らないが爲めに氏の説く處には曖昧なる點が多く、又夫れが爲めに種々の誤解を起させるのである。而して今日心と心の相互作用の過程其の物を詳しく研究して居る社會學者や社會心理學者の著作論文等に付て見れば、心と心の相互作用によりて心と心の結合する過程はつまり刺戟と反應との關係より成立するものと觀念されて居ることは明らかであつて、余の見る處によればブレインナーの説は舊師ギッデンクス先生の説かるゝ同一の刺戟に對する同様の反應説の一種に外ならぬものと思はるのである。要するにブレインナーがヴントの説に對して主張する上述の點は實質上別にヴントの説く處に反對するのではなく、寧ろ

ヴントの説を一層詳しく分析して、氏があまり注意を集中しなかつた心と心の相互作用の過程其物を一層詳しく闡明したるものに外ならないのである。併し該過程其物を詳しく分析して研究して居る社會學者の説に比較して見ると何等新たらしく貢献して居る處はないと思はるのである。只問題は箇人意識と箇人意識との間に成立する右の如き性質の結合を箇人意識、箇人心或は箇人精神に倣らへて又之れに對立する一の實在と觀念して社會意識、社會心或は社會精神又は集團意識、集團心或は集團精神と稱するは穩當であるや否やと云ふことである。而して此問題はつまりブレインナーがヴントの説に加へたる第二及び第三の批評の考察によりて決定されるのである。

今ブレインナーがヴントの説に加へて居る第二の批評と云ふは、前節に於て述べし如く、多數者の心理的結合は單に結合する心理的進動の總計より以上の又之れとは異なる或物であるとするは穩當でないことである。此批評の詳細は既に前節の中に述べて置いたから、茲に之を繰り返すことは避けるが、要するに此問題に關する兩者の差異はブレインナー自身も認めて居る如く、箇人を抽象的に觀念するか、又は具體的にあるがまゝに考察するかと云ふ見地の差異に基因する處大なる

ものである。併し余は何れの見地より見るも多數者の心理的結合は單に結合する心理的進動の總計とは異なる或物であり、又其の生産物たる集團心理現象は幾多の單獨なる箇人意識の生産物の總計とは異なる或物であると觀念するが穩當であると思ふ。若しブレインナーの如く箇人を具體的にあるがまゝに、即ち共同團體に於て生活し、現在及び過去の共同生活の影響の下に成育し發達せるものとして觀念する場合には集團心理現象を箇人意識の生産物の總計より以上の或はより多くの或物と見るは謬妄なる見解であると云ふことが出來やうと思ふ。否な更に其の總計よりもより少なる或物と見るが一層穩當であらうと思ふ。是れ多くの所謂集團心理學者の唱ふる處の減少説 *Substraktionslehre* とも稱す可きものの主意である。併し總計よりより多くの或物と見て總計より異なる或物と見るが穩當でないとしても、より少なる或物と見る以上はやはり異なる或物と見做なければならぬ。より多くであるにせよ、又より少なるにせよ、とにかく同一でない以上は異なる或物と觀念しなければならぬ。而して箇人を抽象的に觀念して考察するに於ては、詳しく云へば箇人を社會外に存立する全く孤立せるものと觀念して考察するに於ては、集團意識は單に多數箇人意識の總計より以上の又之れとは異なる或物であ

り、更に集團心理現象は多數の箇人意識の生産物の單純なる總計より以上の又之れと異なる或物と觀念し得ることはブレインナー自身も認めて居る。更にかゝる箇人は現實には存在しないが、而も之を考へ、之を一定の考察の公準となすことは決して不穩當でないことも亦ブレインナーの認むる處である。さればブレインナーがヴントの説に反對するのはヴントとは異なる見地より考察する場合に於てであつて、ヴントと同じ見地より考察する場合には敢て反對して居らぬと云はねばならぬ。されどブレインナーはヴントの見地の不穩當ならざるを認むるに係らず自己の見地を以て該問題を最も正當に解釋するものと考へて居る様である。しかし余も嚴密に云は、ブレインナーの見地の如きものを以て最も正當なるものと考へる。是れ現實には完全に孤立せる箇人と云ふ様なものは存在せず、また現實に存在する箇人は社會的生産物であるからである。而して靜的に或はあるがまゝに考察するときは集團意識及び集團心理現象は衆箇人意識及び衆箇人意識の生産物の總計より以上な異なる或物ではなくして、寧ろそれより少なる異なる或物であると云はねばならぬ。併し動的に或は發生的に考察する場合にはより以上な異なる或物と見做すことが出来ると思ふ。此靜的見地と動的或は發生的見地との差

別も亦此場合に大に注意す可きものである。ブレトンナトはつまり靜的見地より現存するがまゝに考察して居るから「一民族の言語神話及び風俗習慣は箇人の言語神話及び風俗習慣に就て各自に特有なるもの及び彼等の小團體に特有するものを除き去れる其の總計より異なれる何物でもない」と云ふ様に考へて居るので、而して此見地より考察すれば斯くの如くに觀念することは穩當である。されど是れと同時に一定の瞬間に於て現にあるがまゝの衆箇人の相互作用によりて新たに集團意識及び集團心理現象の發生する場合に付て、即ち動的或は一層適當に云はゞ發生的に考察する場合には集團意識及び集團心理現象は衆箇人意識及び其生産物の總計より以上な異なれる或物である、即ち一種の創造的總合であると考へるが穩當であると思ふ。要するに余の考ふる處によれば、嚴密に云はゞ完全に孤立する箇人と云ふが如きものは現實には存在しない。箇人は何れの瞬間に於ても過古及び現在の社會生活の形響の下に成育し發達してあるが如くになれる社會的生産物である。しかし一定の瞬間に於て新たに集團意識及び集團心理現象の發生する場合に就て考察するに當ては、夫れに参加する各箇人は夫れ夫れ過古現在の社會生活の影響の下に獲得せる特定の内容を有する孤立せる實在物にして、而して彼等の相互作用に

よりて新たに集團意識及び集團心理現象が發生し、其の新たに發生せる集團意識及び集團心理現象は其の場合に參加せる衆箇人の特定の内容を總計せるものより以上の異なる新しき或物即ち創造的總合である。但し此の場合により以上とか或はより多くとか云ふ言葉を用ゆると色々な異論を惹起する恐れがあるから單に新しき異なる或物と云ふに止めて置くが穩當と思ふ。余は以上述べしが如き意味に於て、集團意識及び集團心理現象は衆箇人意識及び其生産物の單純なる總計とは異なる新しき或物と見るのである。而してヴェントの説の眞意も其處にあると考へるのである。然らば集團意識及び集團心理現象を實在的のものとするは穩當であるや否やと云ふに、是れブレインナーがヴェントの説に加へたる第三の批評に關する問題である。

今此問題は前節に於て述べしブレインナーの批評によりて直ちに推察される如くつまり實在概念の如何によりて解決を異にするのである。若しブレインナーの如くに實在概念を決定するに於ては集團意識及び集團心理現象は實在的のものと云ひ得られないことは明亮である。同氏の論ずる如く普通の哲學的用語例に従ふて實在概念を決定する以上はヴェントの如く事實的效驗 *die tatsächliche Wirksamkeit* を

以て精神生活の實在性の尺度となすことは穩當でないかも知れない。Wirklichkeit(實在性)と Wirkbarkeit(效驗性)とは全く性質を異にする概念と見做さねばならぬかも知れない。併し吾人が特に社會生活に付て考察する場合には、假令哲學的に見れば實在と云ふことの出来ないものでも、社會生活上に影響を及ぼすものである以上は之を實在と見做さねばならぬ。即ち社會生活上效驗あるもの Wirksam であるものは社會學上から見て總て之を實在的のものと見做さねばならないのである。神話の如き童謡の如き哲學的には實在と認むることは出来ぬかも知れぬものも社會學上では其の社會生活上に及ぼす事實的影響、事實的效驗の上から見て吾人は之を總て實在として取扱ふて居るのである。ルボシ Le Bon やソレル Sorel などの如くに考ふれば、歴史的生活上最も重大なる勢力を有するものは Instincts や Myths にして隨ふて之れ等のものは歴史的生活上最も實在的のものであるとも云ひ得られるのである。さらにプラグマチズムの立場から考ふれば最も實在的なるものは最も事實的效驗の大なるものであるとも云ひ得られると思ふ。しかし余輩は哲學上の議論には敢て關係せず、社會學上では社會生活上に於ける事實的效驗によりて社會學上の實在概念を決定するは必要であると考へる。假令哲學上實在的のものであつても、若

し社會生活上何等の影響をも及ぼさず、何等の效驗をも有しないものであらば、其は社會學上から見て何等實在の意義を有しないのである。されば余は社會學上では效驗と實在とは同一視する或は效驗を實在の尺度とするヴェントの見解を正當と認め、而して其の意味に於て余は集團意識及び集團心理現象を實在のものとして考へるのである。要するに余は集團意識や集團心理現象は機能的實在 *functional reality* であると考へるのである。

以上述べしが如き理由によりて、余は社會學上ではブレインナーの批評に對して大體上ヴェントの説を辯護せんとするものである。併し是れと同時に上に述べし處によりて察知せらるゝ如く、用語の差異や、哲學上又は心理學上の見解の差異、更に考察の見地の差異等を除き去りて經驗的に集團意識及び集團心理現象の本質を理解するに於てはブレインナーの説は別にヴェントの説に反對せるものでなく、寧ろヴェントのあまり注意しなかつた心と心の相互作用の過程其物を一層詳しく分析してヴェントの説を補充するものと考へるのである。つまり經驗的に集團意識及び集團心理現象の本質を理解するに於ては實在的集團精神説と個人心理説との間には根本的には差異はないと考へるのである。

終りにブレインナー自身の説を批判的に考察して上述の主意を一層明らかに論述して置かうと思ふ。前節に於て述べし如くブレインナーは種々なる人々の間に於て同様なる或は類似せる條件の下にありては同様なる或は類似せる體験（エルレブニラセ）が起ると云ふことを心理生活の根本的事實として樹立し、而して此根本的事實を根據として、一切の集團心理現象の根本的説明を試みんとするのである。其のやゝ詳しき論説は前節中に述べて置いたから茲には敢て繰返さないが、要するに同氏の説はつまり舊師ギッヂングス先生が以前より主張されて居つた同一の刺戟に對する同様の反應説をやゝ異なる言葉を以て新たに言説するものに外ならないのである。しかしブレインナーは別にギッヂングス先生の説の影響を受けて居るとは見えず、全くツムブ、マルベ、シュミット、ザーリング、ラインホルト等の心理學上の新實驗を基礎として立論して居るから、氏はギッヂングス先生の説を祖述して居ると云ふよりも寧ろ他の方面よりして新たに先生の説を確證したと云ふ可きである。しかしてギッヂングス先生の「同じ刺戟に對する同様の反應」と云ひ、又ブレインナーの「同様なる或は類似せる條件の下に於ける同様なる或は類似せる體験」と云ひ、多少言葉を異にして居るが、共に心理的生活に於ける同一の根本的一事實を云ひ表はせるものであることは何

人でも直ちに承認するであらうと思ふ。又吾人が集團心理現象をどん底まで突き込んで説明せんとする場合には自から此根本的事實に到着するのである。併し多くの社會學者は之をあまりに自明なる事實であると考へるが爲めであるか、特に之れに注意を拂ふて居らないのであるが、ギッヂングス先生が始めて之れに注意を集中して社會現象の根本的説明(經驗的意味に於て)を試みられたのは實に卓見であると云はねばならぬ。また最近にブレインナーが先生とは獨立に同じ企てを起したのも確かに卓見である。併しブレインナーは夫れが爲めにヴントの説を根本的に排斥せんとするのは穩當でない。是には多分ライプチヒ派に對するヴェールツブルフ派の感情が混じて居ると思はれる。併しかゝる事はどうでもよいとして、今公平に考ふるときは、ブレインナーの見解は上に述べしが如き意味にヴントの見解を解すると何等之れと衝突するものでないことが發見されるのである。要するに余は上に述べしが如き意味に於て集團意識及び集團心理現象を箇人意識及び其生産物の單純なる總計より異なれる新しき實在であると解するとき、ブレインナーの見解は之れに反對するものではなくして、吾人が該實在の發生及び發達の過程換言すれば心と心の相互作用の過程其物を正當に又最も根本的に説明せんとするに當て

當然採用しなければならぬ見解であると考へるのである。併しブレイクナーは彼の見解よりして如何に心と心の相互作用の過程が根本的に説明し得らるゝかを簡単に示指するに過ぎないで詳しく研究はまだ試みて居らない。又彼の見解其物もまだ充分に精練されて居らない。しかして今日同様の見解を最もよく精練し、且つ其の見解よりして最も詳しく心と心の相互作用の過程を究明して居るのはギッデンクス先生であると思ふ。(此問題に關しては殊に先生の著作 *Inductive Sociology, 1901. Descriptive and Historical Sociology, 1906* 参考)而も余は先生の見解及び説明にも尙ほ種々修正を加ふる必要があると考へ、之を試みて居るのである。それで是れより第六節として以上述べし余の見解の上から集團心理現象の本質を心と心の相互作用の過程の研究によりてやゝ詳しく論述する豫定であつたが、編輯の都合上本論文は是非本回分を以て完結せねばならぬこととなつたから、已を得ず、今回は是まで述べ來りし如く、今日集團心理現象の本質に關する二種の主要なる科學的學說たる實在的集團精神説と個人心理説とに對する余の態度を明らかにするだけに止め、他日題を改めて愚見の積極的論述を試みたいと思ふ。讀者諸氏之を諒察せられよ。(大正五年八月二十九日)。